

特別講演

仮面・ペルソナ・幽霊

稲賀 繁美

(国際日本文化研究センター・総合研究大学院大学 教授／放送大学客員教授)

Mask, Persona, Ghost

INAGA Shigemi

International Research Center for Japanese Studies, The Graduate University for Advanced Studies Professor/

The Open University of Japan, Visiting Professor

(2016年7月16日、第23回美術解剖学会大会)

司会(福江良純)：稲賀先生は今年に入り『接触造形論：触れあう魂、紡がれる形』という、工芸・彫刻まで論究されている非常に幅広い造形論を著しておられます。本日の講演タイトルは「仮面・ペルソナ・幽霊」です。顔は個性を表すということに対し、このレジュメの冒頭から「個性の語源が没個性の典型だった」といった逆説で、解剖学者の美意識の系統発生にまで言及されるお話かも知れません。今回の『顔は表象する』という、美術解剖学会大会のテーマから、その＜表象＞ということで講演を依頼した先生です。どうぞよろしくお願いいたします。

稲賀繁美：ただいまご紹介いただきました稲賀と申します。実は、去年、岡山大学での学会の折、福江先生のすばらしいご発表があって、つい手を挙げて質問した、というのが始まりです。今日はお呼び頂きましたことを改めて感謝いたしております。どこまで皆様の関心やご興味に応えることができるか、ちょっと危ぶんでおりますが、私ができる話をさせていただきます。

『仮面・ペルソナ・幽霊』というタイトルで何のことかわからないかもしれません。幽霊が登場すれば、もうそのあたりでいいかなということで、今もご紹介いただきましたように、あとは皆様からご質問をいただき、一緒に考えさせていただければと思っております。

お手元に1枚のプリントを配っています。最後に幽霊が出てくる予定ですよ、ということの予告です。

1. 「仮面とペルソナ」

和辻哲郎の「面とペルソナ」という有名な論文が1935年に出て、当時たいへん話題になったものです。実は私の題名の「仮面・ペルソナ・幽霊」は、そこから来ているわけです。美術解剖学ないし、解剖学を美術に応用するというのは、実はヨーロッパから来た考え方、単純に言うと、神様が造られた被造物の中でいちばん優れたものが人間であり、人間の形にその精神が宿る、そういう生命体である。したがって、それをきちんと科学的に研究することが大切だ、と。これは18世紀後半からといっていいでしょうか、ヨーロッパ美術アカデミーでの、ひとつの教条であり、基本的な姿勢であります。それから、そこに基づくのが解剖学になりますが、例えば森鷗外や久米桂一郎は東京美術学校の先生でしたが、そういう先達たちの教育を受けて正課として取り入れられたわけです。

和辻哲郎の「面とペルソナ」の問題設定も実は、ヨーロッパにおけるものの考え方を出発点にしているわけです。少し読みますが、「芸術家は『人』を表現するのに『顔』だけに切り詰めることができる」(「面とペルソナ」より)。つまり「人」というのですが、からだは無くても済んでしまう。「顔」だけで済む。四肢胴体が欠けているなどということを全然感じさせない。先ほどの長嶋茂雄の似顔絵がまさにそうですね。顔だけで「ああ、あのんだ」というのがわかってしまう。例えば、水木しげるさんの似顔絵があったのですが、なぜか左手があって、ちょっと待てよと思ったことがあります。(水木さんは戦争で左腕を失っている)。ところがそうした間違いも見落としてしまうことが往々にして発生するわけですね。顔に人全体を見る。

逆に、顔を切り離したのがトルソーです。トルソーも不思議なものですが、もともとローマの彫刻など首や手足が取れてしまったからトルソーになったわけですが、例えば19世紀後半のミュンヘンの美術学校では、むしろそこに純粋な造形性をみるようになりました。

仏像など日本や中国の場合でも、むしろ壊れてしまった、首が無くなってしまった仏像に、美術品としての価値が見いだされる。実際に岡倉天心などは、ボストン美術館に、中国で見つかった首が欠けてしまった石の仏像を入れたいちばん最初の人物ですが、これはまさにトルソーで、美術として鑑賞できる、そういう価値観が欧米にあったからこそ成った、そういう営みがあったこともわかります。

手足そして顔がない、頭部もないトルソー。そこに美しい自然の表現を見いだす。しかしそこには「人の表現」というものを見はしないだろうと。こういう前提で和辻さんは議論しているのです。

そうすると、顔というのは一般的に言って「人」、「人」というのは、その存在の中心的な地位、それを突き詰めていけば「面」ということになる。ここで「面」という日本語が出てくるのですね。和辻さんのひとつの問題設定は、「面」という日本語ないしは漢字で書かれた、表象された観念とペルソナとヨーロッパ語でいわれているものは本当に一緒なのか？ というところから始まります。

「面」というのは何か。「面」というイメージとしてはマスクの面のことを考えます。先ほど首の手術の話がありましたが、首が切られて、そして頭といっても頭蓋骨はどこかへいってしまう、そして耳も無くなってしまいます。首や頭や耳を取り去った、ただ顔面だけを残したものの、それをふつう＜面＝マスク＞という言い方をします。面とマスクが一緒かどうか、これも大問題です。

そこで2つの面を検討しています。ひとつは「伎楽面」です。例えば、安芸の宮島に残っています。奈良の正倉院にもたいへん古いものが残っています。伎楽面は、ひとつの表情を類型化しています。先ほどの発表にありましたカリカチュアにすごく近い形で、人がこの面をつけて一定の所作をする時、「笑い」や「怒り」を露出する・表出するという言い方を和辻はしています。

それに対してもう1つ、それと対照的なものとして彼は「能面」^{うば}を挙げています。ここでかなり面白いことを言っています。能面、特に尉^{うば}とか姥^{うば}とありますが(Fig.1-(1)~(2))、これについては、まるで急死した人の顔に極めてよく似ている。死人の顔、死相ではないかと言っています。つまり、マスクとしての面は「死んだ顔」をしている。

ところが、その死んだはずの顔が、俳優^{わざおき}の演ずる面となると、例えば手を払うように動かせば、「面が既に泣いているのである」。ここで生きて喜怒哀楽を表すような存在、いわば「いのちがこもったもの」になるという。

これは人形浄瑠璃などもそうですね。不思議な逆説があって、人形というのは舞台の上で死ぬるのです。操り糸を切られたり、人形師が手を離してしまうとバタッと倒れてしまって、見事に死ぬるのです。ところが、俳優というのは命がこもっているものですが、舞台の上で死のうと思って、簡単には死ねません。死んでいるはずの人形のほうが、その顔のほうが、実は生きている俳優たちよりも、もっと一心に、自由に動ける。そういう逆説があるということも和辻は感じていたのです。

先ほどから仮面と言っていますが、これはギリシャ語に戻るとペルソナの語源をとります。Persona, Personという言葉も、これは実はギリシャの古典悲劇における俳優さんがつけているマスクのことを言います。プロソポン(*πρόσωπον* (prosopon: 古代ギリシャ語))が一般的な言い方で、“pro”というのは「前」ですね、sopon (ソポン)とありますが、これは目。やはり「目がついている面」という意味が非常に強く＜まなざし＞が意識されている。そういう言葉から、実はペルソナという言葉が出てきます。

ラテン語でペルソナというわけですが、これをギリシャ語では「三位一体」というときに使われる、〈三位^{さんみ}〉というのがペルソナだったということとはよく覚えていらっしゃると思います。公会議でいろいろ議論があり、プロソポン(*πρόσωπον* (prosopon))という言葉は途中で異端になって使えな

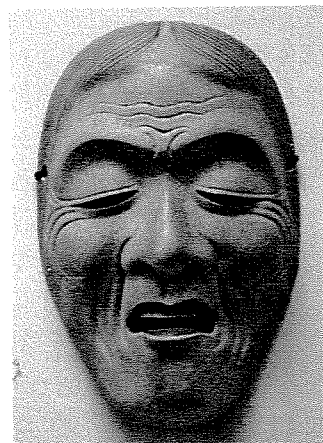


Fig.1 (1) 「姥」室町～安土桃山時代 東京国立博物館蔵(金春宗家伝来)、重要文化財

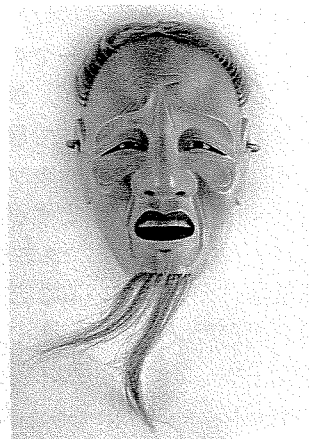


Fig.1 (2) 「小尉」

くなり、ヒュポスタシス（*υπόστασις*）という言葉がギリシャ語では用います。これは：“sub-stance”という具合に、英語に訳される言葉です。

というように、実は翻訳の中で「ペルソナ」という言葉はかなり複雑な経緯を辿っていますが、ひとつだけ指摘しておきたいのは、その三位一体という時の〈聖霊〉です。これはギリシャ語でいうとハギア（*hagia*：聖）、プネウマ（*pneuma*）、*pneuma*は人間の呼気でもあるし、「風」、「風の神様の息吹」という意味にもなります。日本語でいう「息吹」にとても近い感じがあります。それがラテン語に訳され、スペインでスピリトゥス（*spiritus*）というように置き換えられた。

しかしプネウマ（*pneuma*）とスピリトゥス（*spiritus*）が同じかという、これもかなり問題があります。もともと〈息吹き〉であったはずのものが、スピリッツというとわれわれはもう「精神」と思い込んでいます。しかし精神のもともとの言葉は、先ほど呼吸の話が出てきましたが、その呼気のことを言います。腹式呼吸のことも出てきましたが、呼吸は極めて大切です。それが、実は顔の表情に影響を与えている、という話も先ほど伺いました。これが英語になると *holy ghost* といいます。突然ここで *ghost* 幽霊が出てきたのですが、「聖なる幽霊」なんですね。

特にカトリック神学の中で聖霊は、極めて扱いが厄介なものです。ですがここでは、ペルソナという人格なるものが宗教と結びついて、キリスト教に重ねたとき、英語にしてしまうと幽霊としか言いようがないものとくっついてくる、ということを指摘しておきたいと思います。

2. 「仮面」「マスク」「人格」

次にマスクです。マスクという言葉も仮面ですから見ておきましょう。これは語源がはっきりしないようですが、どうもアラビア語系統から来たらしい。それが地中海に伝わってイタリア語に伝わって、今でもヴェネチアでは仮面劇がたいへん盛んで、仮面舞踏会に実際に参加されると面白いのですが、オペラみたいこういうのを被ります。仮面を被ると面白いですね。本当に人格が一変します。

ひとつは「自分が隠せる」んですね。隠せるけど同時に違う人格が自分にくっつく。そういう意味で、マスクはある種恐ろしい力を持っています。この *maskhara*（*mashara*）という、もともとアラビア語に起源する言葉は「道化」のことを言っています。道化はもともと王様の横にいて、王様がやらないことを道化はやってみせて、普通だったら殺されてしまうようなことでも道化は王様に忠告ができる。シェークスピアの劇などにもたくさん出て来ますが、そこからマスクという言葉の起源が由来します。そうすると、ギリシャ語のペルソナとしての仮面と、このマスクとはだいぶ違うということもおわかりだと思います。

化粧のマスカラも、実はここから来ているわけです。だから、これは仮面をつけるわけではないのですが、化粧というのは「自分の肌の上に塗料を塗ることで変装する」ので、これも一種のマスクであるということです。女優さんの場合、化粧をしていないスッピンは、われわれはまず見ないわけですね。そうするとたまに「どっちが本物の？」というようなことがあります。そういう方たちに、舞台に立っていただくためには、ちゃんと控え室で30分ぐらいかけないと準備ができない、ということもあります。

そこまで確認して、パーソン、ペルソンに戻しましょう。英語の辞書をご覧になると、われわれ英語やヨーロッパ語を習う時、人称づけが必ず出てきます。第一人称の「わたし」、第二人称の「あなた」、第三人称の「あのひと」とかそういう言い方をします。ところが、先ほども言いましたように人格という意味も含まれているのです。person といいますと、例えば法人格のことも person という具合に言うわけで、広がりを持っています。

ここまで見て、「面」という言葉。日本語での「面」に今は限りましょう。この場合にも、今のパーソンにわりと近い意味を持っています。例えば「この面々」「ここにいらっしゃる面々」と言い、面というのはひとつひとつの顔のことを言いますが、これは「人々」のことを言います。

それから、中国ではメンツーと言いますが、「面子をつぶす」というのはその人の本質を傷つけることで、「面子をつぶす」ということは、中国社会で一番やってはいけないことになっています。日本でも「面目」という言葉があり、そこに顔という言葉がつながってくる。つまり、「面目をたてる」というかわりに「顔をたてる」と言ったり、「面目をつぶす」という場合に「顔をつぶす」と言ったりします。つまり「顔」の上に、自分の人格の焦点がある。そんな意識が極めて濃厚な様子も見えてきます。この段階で、動物の場合はどうなのかという疑問が浮かびます。

また「顔」という言い方を日本語ではします。「顔」のことを「おもて」とも言いますが、どうして「仮面」だと「おもて」になるのでしょうか。例えば「能面の^{おもて}面」は仮面のことです。仮面というと仮の面と書きます。これは先ほど説明したとおりで、マスクというのは道化が何かに化けるために被る、そういう仮面でした。

そうすると、自分の本質をさらけ出すはずの「面」^{おもて}だったものが、実は何かに仮装するための「仮面」でもある。だから、顔の表面、それをどのようにつくろうか、どのように演出するか、ということは、真実と虚偽との交錯と言っているのでしょうか。真と虚言の裏表が面の上に表れています。だから、私が言っていることはあまり信用しないでください。私がこうやって真顔で話していることは、真っ赤な嘘かもしれません。というわけで、実は「顔」というのは、なかなか厄介なものだというのが、哲学的に今までの語義を見ると、わかってきます。

日本語で「表」の反対は「裏」ですね。「あの人は裏がある」と言えば「顔は誠実そうだが実は腹黒い」の意味ですが、ここになぜか「お腹」が出てきたりします。つまり、表だけ、顔だけでは成立しない人間関係の「腹の内」が見えてくるのです。

↑

3. 「おもて」と「うら」

先ほど、お医者さんが診察をするときは顔を見なくてはいけないと言う話がありました。顔は入り口ですが、その裏に何かが隠されているということもあります。そして表面に対して裏面という言い方もできます。そして外面^{そとづら}、外面は外面とも言いますが、それに対して内面^{ないめん}があります。

例えば血液検査やX線のほうがわかりやすい。西洋の外科の場合、「病巣」、病気になった部分は外から見えないことがある。しかしそれは皮膚を切り刻んで、その中に解剖のメスを入れれば、そこで「ここに病巣があった」という形で見つかる。ここには、ヨーロッパの真偽観が現われている。「真実」とは「隠されたものを光のもとにさらす」ことである、そういう真偽観を極めて強く反映している。

こういうことについて哲学者たちは一所懸命考えています。坂部恵先生の本は、今読み直してもたいへん素晴らしい本です。40年前の著作で、残念ながら坂部先生は数年前に亡くなりましたが、知らなかった方はこれをお読みになると、目から鱗が落ちるようなことが書かれています。

坂部先生の「〈おもて〉の解釈学試論」(『仮面の解釈学』)のいちばん肝心な部分をお話しします。「表」とは必ずしも物理的な表面を指すわけでは無い。それから、「顔は表象するだけのものではない」、さらに「顔は表象なんかしない」という方向に、今から話をもっていきたいと思います。

「われ」「わたし」というアイデンティティーの「しるし」であるのが、顔、そして表だと言ってきましたが、どうもそうとは言い切れない。ソシール言語学では「意味されるもの」はシニフィエ (signifié) と呼びます。例えば、「僕は総理だ」の総理、prime ministerだというその人格の本質は「顔」において、表象されるはず。「顔」において「総理」が「意味されるもの」であるはずですね。だけど、顔を見ただけでは、それが安倍総理の顔でなければ、現在の総理だはわからない。ということでシニフィエ (signifié) 「意味されるもの」と、「標識としての顔」「意味するもの」(signifiant) との間には実は距離がある。

この両者は偶然に重なったのか、必然があって重なっているのか。そこまで考えると、「おもて」、「顔の表面」というのは、実は「それだけでは何も意味されない。だけど、何か意味を表出しようとしているものだ」という言い方ができます。エルンスト・カッシーラー (Ernst Cassirer) という有名な哲学者がいました。彼はAusdrucksfunktion 表情機ということをも20世紀20年代に論じています。坂部先生は、「おもて」というのはその「象徴」としての「記号というものの概念そのものが破綻してしまう場所にあらわれるもの」なのだと、不思議な洞察を導き出しています。

次に語源説ですが、「表」^{おもて}というのは漢字で書いたように表面の「表」でもあるし「面」でもあるのですが、「母屋」^{おもや}という言葉を考えて、これは「主たる場所」という意味もあって、それがたぶん顔に重なっている。そして語源的に諸説ありますが、日本語でいう「おもみ」にも結びつくだろうと。実は「おもみ」というのは「思ひ」とつながるという学説があります。つまり、顔を見ると人が何を思っているかが見えている人に伝わる。そういう部位として、古代の日本人、日本語を使っていた人たちは、この「おもて」というものに大きな意味を置いていたのだろうと。これは、ヨーロッパ語には無い観念です。

例えば「おもざし」という言葉。「おもざし」は、「まなざし」とどう違うのでしょうか。「まなざし」と言

うと、例えばこういう講演の時にあがらないようにするにはどうするか。一番後ろの人に目をあわせて、まなざしを向けると、だいたいあがらないですね。

ところが「おもごし」というのは、控えめな方がなんとなく前かがみになって、お客様のほうに「直に視線を向ける」というのは恥ずかしいし失礼にあたるのではないかというような、奥ゆかしさを感じさせる言葉です。「おもごし」も、日本語の語彙を考えると、日本語を使う人々にとってかなり大切な「顔」の使い方、つまり視線を直接向けないが相手に対する敬意を表す表現であると、それが「おもごし」という言葉の中に保たれているのかもしれませんが、そこまでくると、「顔」「おもて」というのは、実は「おもいが象られる」、そういう場所である。それを口から発声することが「語る」ことになるわけです。

これも解剖学的に初歩のイロハを言ってしまうと、つまり、赤ん坊が言葉を発するようになるためには、顔の筋肉と食道に通じる声帯をどううまく呼吸に合わせてコントロールするか。その機能が前頭葉のかなり広い部分を占めているということは皆さんよくご存じだと思います。それと隣り合った部分に人間の場合は手・指の感覚を司る部分がある。これは、進化論的には極めて最近になって発達した領野です。

つまり、「顔」と「語る」ということも近い関係にある。これはヨーロッパ語でもそうですね。Personのperというのは、「何々を通して」という意味です。Sonは音のことを言います。ラテン語でPer-Sonare（ペルソナレ）という言葉は、もともと「声高に唱え、唱えることで人々と意見を一致させていく」行為としてあったのです。

例えば、フランス語でIl n'y a personneという「誰も居ない」ということですね。personne、「人」と思っていたのだけど、これは何の人称でもない。つまり空虚な記号としてあって、それに否定辞がくっつくことで「誰も居ない」という否定形になってしまう。これはフランス語だけではなく、英語にも似たようなのがありますし、ギリシャ語にもあります。というわけで、ペルソナ（personne）というと「人」だと思っているのですが、これは空虚な記号ではないか、ということを言語学者エミール・バンヴェニスト（Émile Benveniste）は言っています。「パーソン」で頭が混乱したかと思いますが、これは誰の声なの？ 私が発している声って私の声なの？ というと、そうとは限らないという不思議な世界に入っていきます。哲学の話はここまでにします。

4. 変身と憑依

能面の話で姥^{うば}そして小尉^{こじょう}に冒頭で触れました。われわれはある年齢になると、自分の親が死ぬという経験をします。そういう時には「ああ、確かに見た顔だ」と大人になると嫌でもわかることですね。その死んだはずの顔が、実は舞台に生きている。なぜ能はそういう不思議なことをしたのだろう？ これがひとつの問題になると思います。

先ほど「面とは自分の人格をあらわすのか？」という問いを出しましたが、有名な例としては、クワキルトの仮面がご紹介します。カナダの西海岸から北の方にいた先住民で、とても芸術的なマスクをつくるので有名な人たちです（Fig.2）。お祭り際にはポトラッチといって、とにかく自分の財産を全部投じてしまう儀礼でも有名な人たちです。

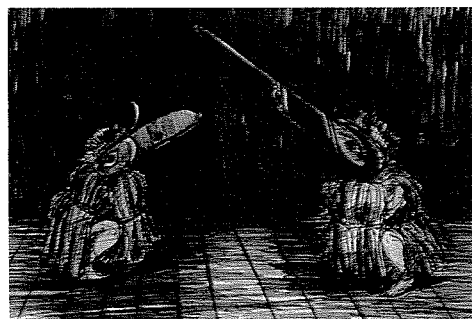


Fig.2 北米先住民クワキルトの「面」

祭礼の映像を見ると、仮面が変化した、変形した、というのがわかります。パカッと口が開いて、中から次の面が出てきます。これはカラスですけど、このカラスは彼らのトーテムですね。それがあある段階で、その中にもう1つ別の顔が出現する。

どちらが本物ということではなく、トーテムの上に乗っかって、それで自分たちがその仲間であるということ、その裏にはじめて自分の人格があるんだということが、この仮面劇の中で見事に示されている、そういう例だと思います。

このような例は仏教の世界にもあります。これは有名な《宝誌和尚立像》です（Fig.3）。今は国立博物館にありますが、顔が割れてそのあとからまた顔が出てきます。

それで、1960年代末にフランスから来た有名な記号学者、ロラン・バルト（Roland Barthes）はこのように言っています。Le signes est une fracture qui ne s'ouvre jamais que sur le visage d'un autre. 「記号とい

うのは1つの亀裂なんだ」fractureというのは「骨折」という意味にもなりますが、ポキッと折れてしまったのだと、それはどこに発生するかというと、記号の顔面、visageと書いてありますが、まさに「顔」ですね。顔の上にはしか開かない。この仏像を見て彼が言い出したのか、バルトが「記号の骨折」ということを言っているのか、京大の先生がバルトにこの仏像を見せたのかわかりませんが、こういう現象が発生します。

そうすると、自分の顔の外面^{そとづら}には、自分の本性といいますが、それは隠れたままで、それが割れて初めて何かが出てきます。何が出てくるのでしょうかね。顔の裂け目から現れたのは、はたして仏性^{ぶつしょう}なのか、それともどこまでいったって、そんなものはまやかしのだよという空性^{くうせい}なのか。これは仏教の上ではたいへん面倒な問題になります。

バルトの言ったことは、記号というものが世界を完璧に記述できるということ。通念がヨーロッパ世界ではたいへん強いが、そんなことは無いんだよ。つまり「記号の限界」ですね。東アジアの、とりわけ仏教の世界では、それをちゃんと悟っていたようだという。それが彼の日本に来ての記号学的な悟りであった。しかしそれが仏教学的に見て正しい構造の解釈だったのかということ、これはまた議論が出てきます。

村上隆さんの《五百羅漢》をご覧になった方はどのくらいいらっしゃるでしょうか (Fig.4)。「漫画も美術の世界に入れよう」ということで「スーパーフラット」な活躍をした彼は、やはり50歳を過ぎると仏教に回帰して、自分が宝誌和尚に扮して大器晩成を遂げてしまうのです。顔が割れて現れた二つ目の顔。これを見ると「どっちが本当のムラカミ？」という質問をしてみたくになります。

次にこれは文楽、人形浄瑠璃ですが、ヨーロッパの人はこれを見て困ってしまうらしいのです。舞台に人形がいて、その後ろにいる黒いのはなんだと、黒子のは見えないことにしておけばいいんだけど、その横で、あの顔を出しているおじさんは何だ、邪魔でしようがない、というんですね。主遣いの人、頭に何も被っていない。その顔はむき出しのままで化粧っ気もない。つまり、客から読まれるように、この顔は提供されているわけです。無視しようと思ったが無視できない。だけど、そこに何を読むのかということ、「私の顔を見てもそこに読むべきものはなにも無いよ」、ということを舞台の上で示しているんだと、バルトは解釈しています。よくこれだけ面倒なことを考えられると思いますが、そのように説明しないと困ったのでしょうかね。

バルトより前にポール・クロードル (Paul L. C. Claudel) という人がいました。関東大震災の頃に駐日フランス大使として着任した大劇作家で詩人です。彼は、黒子の人も目について困るし、太夫さんの顔も目ざわりで最初は気になるけど、しばらくすると気にならなくなるんだよ、という塩梅の説を出していたんですね。しかし半世紀後にできたバルトは、ポール・クロードルが大嫌いで、それと逆のことを一所懸命言おうとしたようです。

先日インターネットを見ていたら、人形浄瑠璃にこんなことが書いてありました。演目は『日本振り袖始』です。出雲大社の八岐大蛇^{やまたのおろち}で、人形は八岐大蛇の精です。若い女性たちは何を見ているかということ、人形遣いを見ているのです。桐竹勘十郎さんに命を注ぎ込まれた岩長姫、これが実は八岐大蛇なのですが、その「嫉みも狂気も生きながらへびになってしまったその哀しさも、胸が苦しくなるぐらいに伝わってくる」。とにかく、この勘十郎さんって格好いい。つまり舞台上、どうも人形を見ているのではなく人形遣いを見ているわけです。

17世紀に人形浄瑠璃が始まってすぐ、女性たちは何を最真にしていたかということ、美男子の太夫です。中には駆け落ちしたという事件も起きています。それを劇中劇にした新作の人形浄瑠璃もあり、そういうフシがあったのです。舞台上のどっちが本当の「顔」なの？ という話になるわけですね。

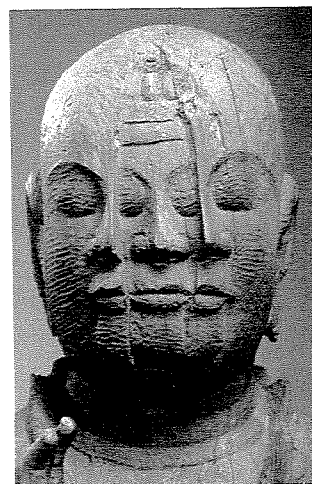


Fig.3 西住寺 宝誌和尚立像顔部

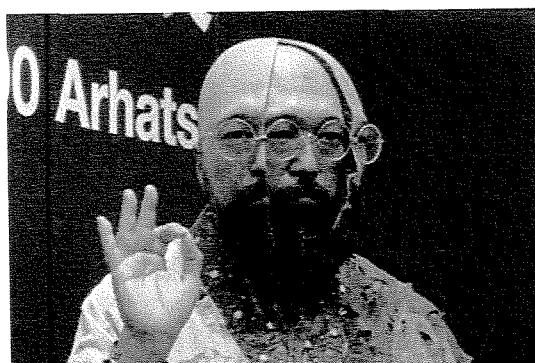


Fig.4 2015-6年 六本木・森美術館での展示
「村上隆の五百羅漢展」

ブラジルで戦前期に映画を上映するのに、大きな暗幕を張って野外で映画をする。すると弁士が必要になります。その弁士が美男子でないと務まらなかった。そして、翌日になると、そのコロニー（入植地）一番の美人だったお嬢さんがいなくなる。弁士と駆け落ちをしてしまったことが発覚する。こういうのは、いまだにブラジルの日系の方々が思い出話として語ってくださいます。同様に、舞台上で「本当の顔」というのは、見えないはずだったけど見えている。太夫の美男な顔だったということになるわけです。

5. 胎児の記憶

最後に三木先生の話をしたと思います。どうして「顔」に、これだけ不思議な力が備わっているのだろうか。東京藝術大学で80年代まで生物学と解剖学の教鞭を執っていた三木成夫先生がいらっしゃいます。彼はすごく面白いことをおっしゃっています。『胎児の世界』や『内臓とこころ』など、学生さんたちに一生に一度は読んでいただきたい本ですが、その中に、今われわれの持っている「顔」というのは、生命誕生以来の「地球の生命の歴史」を要約し縦走しているのだ、という一節があります。デボン紀から中生三畳紀（中生代の初期）に現れた動物は、両生類から爬虫類を経て進化を遂げ、海から陸にあがってくる。その時々「顔の記憶」が、われわれ人間の個体が発生する中で再現されている。そういう仮説を出されたのです（Fig.5）。

三木成夫先生の著作には、小さな胚を切るところを生々しく書かれており、大変な苦勞をして成されたデッサンがあります。複製では大きく見えますが、実物はとても小さなものです。ホルマリン漬けの胎児の首を切るときに、大変な戦慄と一種の罪悪まで感じたということを先生は書いていらっしゃいます。これは新生代の第三期と書いてありますが、この時期の卵の中に現れる「顔」は、一番原始的な哺乳類によく似ていると言われました。

先ほど、似顔絵はどこまで似ているかという話がありましたが、なかなか厄介です。「醜いアヒルの子の定理」というのをご存じですか？ 渡辺 慧 というハワイ大学でたいへん有名だった科学哲学者がいます。彼が書いた岩波新書の本（『認識とパタン』（1978））はまだ入手できるはずですが、つまり、似ているか似ていないかというのは、「似ている」という座標軸をもって立てないと数値としては測定できない。そこで議論が循環する。だから「自然科学上は似ている・似ていないという議論はできない」ということを、彼は数学的に証明しています。

そうすると、われわれは「顔」を認知するとき、知らず知らずに何かを強いクライテリアとして選択しているわけです。それによってカリカチュアが「本物そっくり」の戯画になっていると思ったり全然似ていないと思ったりするわけです。

このメカニズムの解明はまだ将来のことで、逆に言うと、この三木成夫先生の仮説というのも科学的な意味で「似ている・似ていない」の議論になってしまうと、水掛け論になりかねない部分があります。いづれにしても彼は、ここで「おもかげ」という言葉を使うのですね。

Fig.6は縦軸が歴史年代で、生物が進化したといわれる図式です。それに対して下のカーブを描いているのが卵発生で、例えばアカウミガメとヒトの場合、時間軸をとると「ずれている」というのがわかります。この図の要点は、上のカーブと下のカーブの間にこれだけの距離があるということを示すにあるのです。だから、形のうえでは似ているのだけど、それが1対1に対応するわけではないし、時間軸の上でも同じスケールで動いているわけではない。もちろん時間軸は何億年という話ですし、卵発生のほうは初期発生から個体発生ですから、両者はスケールが全く違うわけです。図式としてはかなり古い図式になりますが、重要なところは、この「落差」。そして、「おもかげ」について彼は語ったわけです。つまり、卵発生の背後に、過去の証拠の痕跡として、生物の進化の様子が「幻」のように浮かびあがるという言い方をしているらしいです。

こうした見方を、分子生物学をやっている今の多くの学者の方たちは、もうほとんど相手にしてくれません。ただ、実際に胎発生の推移を見ていく、解剖学的な知識としてはたいへん面白い。そして、われわれの知覚を刺激してくれるものではないかと思います。

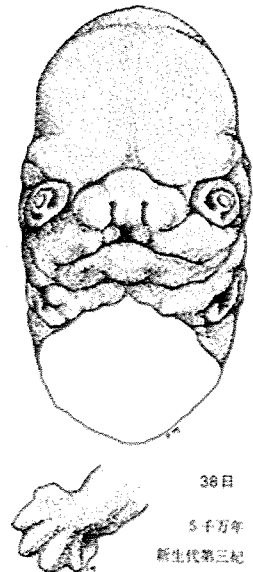


Fig.5 三木成夫
「人胎児の顔貌変化」より
受胎後32日・38日

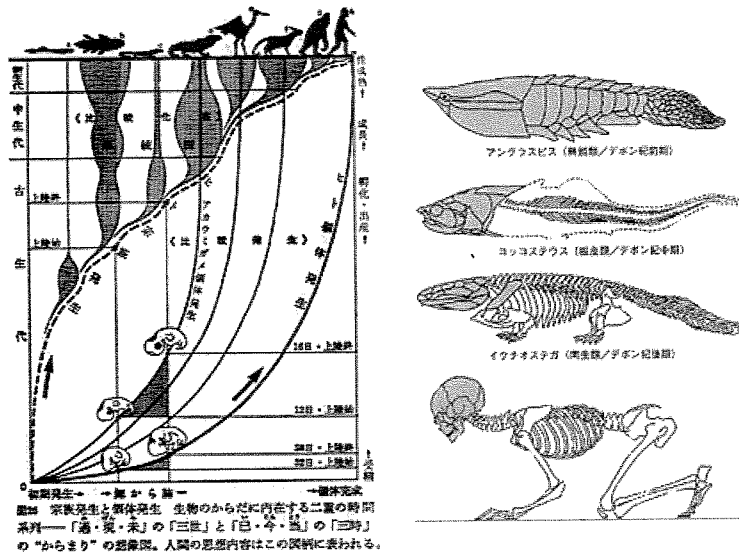


Fig.6

実は、同じようなことをラフカディオ・ハーン（小泉八雲）が言っています。「音もせで思ひにもゆる螢こそ啼く虫よりも哀れなりけれ」Not making even a sound [yet] burning with desire, — for this the firefly indeed has become more worthy of pity than any insect that cries. これは源重之の和歌と、ハーンの訳ですが、たいへん美しい文章です。その最後にハーンはこうつけ加える。「私としてはこの考えを捨てきれない。払いきれない。生命以外の物質も、なんらかの方法で誤りなくただひたすらに何かを記憶している。そして生命存在のいかなる小さな単位の中にも無限の潜在的可能性が潜んでいる。その理由は単純で、あらゆる究極の微少の原子には、すでに消滅した幾億兆の宇宙の無限な不滅の経験が宿っているからであると」（『螢』『骨董・怪談』平川祐弘訳）。これは三木成夫先生よりもっと大きなことを言っているわけですが、1つ1つの分子として、1つ1つの命の中には、そこにいたる地球の生命の歴史、そして宇宙の歴史、時間というものが圧縮されて籠っているのだ。だからこそ「一寸の虫にも五分の魂」というように日本人たちは言っていたんだと。そういうことを小泉八雲ことラフカディオ・ハーンは一所懸命、欧米の人たちに伝えようとした。

そうすると「顔」というものの背後には、われわれの霊、われわれの祖先が透かして見えるのではない。それを見たいというのがハーンの思いだったわけです。幽霊についてハーンが書いた文章ですが、「多くの親しい顔の特徴から形づくられた思い出によって重ね書きされた像」、そして「愛情によって混ぜ合わされた1つの幽霊のような人格となった追憶の合成体」。“composite of recollection”という言葉を使っていますが、これは実は、来日以前、アメリカの南部シンシナティに居た時にハーンが思い描いていたことで、そうした魂の集合体が実は幽霊なのだ、と言っているのです。

その後、来日したハーンは松江に行った時にセツと結婚して、新婚旅行で加賀の潜戸を訪れるのですが、そこで、ほぼ同じことを繰り返しています。そこで見たのが、祖先のたくさんの霊たちが集まってつくられた合成体としての霊気であると。

どうしてこんなことを言い出したのかと言いますと、チャールズ・ダーウインの従兄弟にあたるフランシス・ゴールトン（Francis Galton）という人がいます。これは人間の顔写真ですけれども、重ね合わせですね、コンポジットにした集合的肖像というものをつくりました。現在の芸術家でも同じことをやっている人がいて、たぶんこれはゴールトンのまねをしたのだと思いますが、たくさんの写真を集めてきて、それを全部重ねて焼きつけてしまうんですね。例えば100人とか200人の犯罪人の顔を焼きつけるとどうなるのでしょうか。「犯罪人特有の顔」があらわれるか。実は出てこない。むしろ、特異な顔を重ね合わせると、すべての凸凹したところが落ちてしまって、ごく平凡な平均的な顔になってしまうと言っています。そのゴールトンの集合的肖像論をラフカディオ・ハーンは一所懸命読んでいます。日本に来て、幽霊とかゴーストとか言われている先祖たちの霊は、全部寄り集まって無名になってしまったものなのだ、という具合に、空想ですが、彼は一所懸命にそういう説を唱えたというわけです。

例えば琵琶法師の「耳なし芳一」の話。平家物語の琵琶を弾く芳一が、おばあさんか誰かに、あなたはたいへん上手いから琵琶と歌を聴かせてくれと言われた。しかし、どうも様子がおかしい。真夜中三時に外出して、ひとりで芳一は琵琶を奏でている。見るとそこは安徳天皇のお墓があったところで、平家落人の霊が集まっていたようだ。このままでは芳一は向こうの世界、つまり、霊の世界に連れ去られてしまう。それに気づいたお坊さんが、体じゅうに般若心経を書いたわけです。ところが、耳だけは書き忘れてしまった。それで、主人、安徳天皇についていた人（霊）から、芳一を今晚は連れて来いと言われた鬼（霊）は、般若心経を書いたところは芳一の姿が見えなかったんですね。経を書き忘れた耳だけが見えていたので、耳をひきちぎって持ち去ってしまったという。芳一は大変ひどいめに遭ったのですが、それに耐えたという話です。

今日は顔の話をしたのに、なぜここで耳なのか。どうも、そうっと狂気の淵を跨ぐ、ということになると、顔の外郭についている耳というのは、その境界になる。耳を切り取るということが、わりと頻繁に、精神医学でも発生します。例えばヴァン・ゴッホ。彼は耳を切ってしまいました (Fig.7)。それ以前に彼は、日本の坊さんになりたいと言っていました。そして1889年12月24日、アルルでゴーギャンと大げんかをして、精神錯乱になって耳を切ってしまった。坊さんで耳を切った日本人もいますね。国宝の肖像で有名な明恵上人も修行の途中で (Fig.8)。彼は華嚴経ですが、やはりたいへん厳しい修行をして自分で耳を切ってしまったのです。

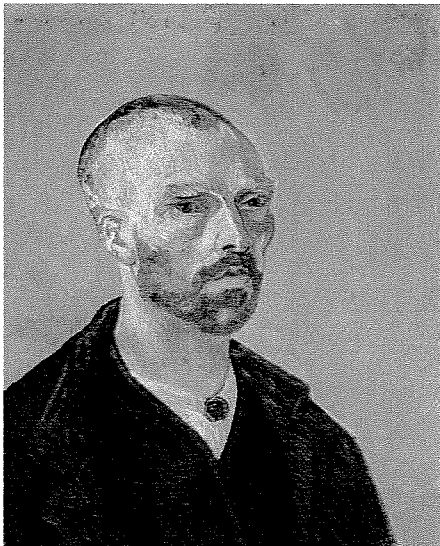


Fig.7 ヴァン・ゴッホ《坊主としての自画像》
1888年9月 (F476)



Fig.8 《明恵上人樹上坐像》国宝

洋の東西でずいぶん離れているのですが「耳を切った」ということは一緒です。それから、先ほどの耳なし芳一の話も、今で言う精神障害ですね。何かに取り憑かれてしまうという状況を脱するために耳を切った。そして耳を切ることによって、自分の「顔」をこの世に連れ戻すことができた。そういう極限の経験があったということがおわかりいただけると思います。

左は、日本人になりたかった時の坊さんに扮したゴッホです (Fig.7)。右 (Fig.9) は耳を切ってしまったので包帯をあてていて、富士山のある浮世絵がぶら下がっていますが、後ろに描かれているのは十字架ではないかと。これはひとつの読みですが、十字架だと解釈する人もいます。

となると、モリムラさんが、なぜ耳を切ったゴッホのまねをしたかということもわかってくるだろうと (Fig.10)。森村泰昌さんは、芳一と同じように耳を切られて幽霊に「たぶらか」されかけている。そうすることによって、世界の美術の歴史の中に自分の顔を溶け込めると同時に、モリムラの顔が世界の美術史の中に広がると。そういう芸当を演じていた。これはまだ「モリムラさん、そうでしょ?」と言って「うん」とは言ってもらっていないのですが、このように書かせていただいたのは、私が今日配布させていただいた文章、「「私」と「わたし」が会おうときーあるいは双子の幽霊：輪廻転生説と複数字宙論から」(『国立国際美術館ニュース』214号2016年6月2-3頁)です。

これで終わりにさせていただきたいと思います。ありがとうございました。



Fig.9 ファン・ゴッホ《坊主としての自画像》
1888年9月 (F476)



Fig.10 森村泰昌《肖像（ゴッホ）》
(1985年 国立国際美術館蔵)

司会：ありがとうございました。これぞ人文科学というような非常に幅広く奥深いお話でしたが、たくさんの興味深い教えがあったと思います。私のほうから1つ、「顔は表象しない」というところの心がどうということなのか、わからなかったのですが、それについて教えてください。

稲賀：それを今から説明しなくてはいけないところだったのですが、「表象」という言葉は、representationという難しい哲学用語です。東大の駒場には表象文化論学会があり、4年前の2012年、『ペルソナの詩学』という、まさにペルソナ、仮面という特集号があります。

当時まだ駒場でその分野のトップだった小林康夫さんが、美術家・森村泰昌さんと話をしていますが、表象をrepresentationという言葉の訳として見るなら、「顔はrepresentationなんかしていないよ」というのが2人の話なのです。それが表象という学会のトップの対談に出ているというのは、大変皮肉なことだと思っていますが、幸か不幸か、私はその学会の会員ではないので発言権がありません。というので、ここで憂さ晴らしをしているのですが。（笑）

representationという言葉、これは古代ギリシア以来のミメシスという、つまり「何々を模倣する」という、近代語で言う意味のコピー、複製の美学にのっとっています。本日冒頭に申しましたが、「神様の似姿としての人間」という『創成』の理念も強くあるのですね。そこで18世紀に出てきた美学概念が“representation”で、その日本語訳が「表象」です。

しかし今日見てきた日本の面、「おもて」というのは、オリジナルとコピーという対^{つい}には還元できないと思っています。実は坂部恵さんも全く同じ考えです。「顔は表象する」という時に、いったい何を意味しているのだろう。日本の能面の場合、何を表象しているのかというと、その答えは、たぶん「空白」になってしまう。ロラン・バルトもそのことを悟っていたわけですね。

「うつす」という言葉がありますが、われわれは「うつし」というとコピーと思ってしまう。しかしこれは、われわれが西洋語にすり込まれているわけで、和語の「うつす」というのは、たいへん広い意味を持っています。場所を「うつす」と同時に、他人の魂がついてしまう憑依のようなことも「うつし」と言うのですね。そして「うつせみ」という言葉がありますが、「うつしみ（現し身）」というものは元々、われわれの生きている肉体です。だけどそこから魂が抜けた空っぽのことを「うつせみ」とも言う。ここには仏教の日本化が働いています（Fig.11）。こういう広がりを持った言葉の上に、実は「顔」というものがくっついていて、だとすると、それを、ヨーロッパで発展したrepresentationの美学ですべて解き明かすのは、私は無理だと思っています。

司会：はい。ありがとうございました。会場の皆さんいかがでしょうか。どうぞ。

質問者1：東京藝大で芸術学を専攻している、修士課程の者です。最後に耳の話が出てきて、そこに落とし込むには、どういうふうになれるのかお聞きしたいのですが、ゴッホ、明恵上人、森村ときて、森村に



Fig.11 うつせみのからは木ごとにとどむれど魂のゆくへを見ぬぞかなしき (古今・物名)

Cast off skin of the cicade remains on each trunk of the trees, And alas, the souls within have moved away I don't know where

行く前に、三木富雄という耳ばかりつくっていた方がいたと思うのですが、大小さまざまな耳だけをなぜあそこまでつくったのかというのはとても興味深いと思うのですが、今回の先生の話の中で、彼の作品はどのような位置づけになるのでしょうか。

稲賀：ありがとうございます。たいへん良い質問です。しかし、私が答えを言ってしまったら面白くないですね。そうした論脈での三木富雄論はまだ無いと思います。なぜ彼があんなにたくさん耳をつくったか。ぜひとも良い論文を書いていただけないかな。私のサイトにある八木一夫についての論文で、三木富雄の耳がどう変貌していったかという話は書きましたが、その続きは若い人たちにやってほしいですね。

質問者2：先ほどの先生への質問で、表象というドイツ語はあるのですか？

稲賀：はい。ショーペンハウエルの『意志と表象としての世界』のVorstellung, われわれは“representation”の訳として今は「表象」と言っていますが、中国でも韓国でも違う言葉を使っていますし、文脈によって訳語が違います。表象学科も、それをつくるために文科省と大変な交渉をしているわけで、先週、新潮社で谷崎潤一郎賞を受けられた蓮實重彦氏は初代の専攻長でいらっしゃり、映画雑誌Representationの編集長でもあった。presentsにreが付いてrepresentとなりますが、“re”がくっついてしまったものというのは、ヨーロッパ語ではなかなか面倒くさい。選挙もrepresentです。Proportional representation（比例代表制）など。つまり代理の「代」というのは“re”なんですね。だけどそのこと自体、われわれ、18歳以上は選挙をしているわけですが、representationがわかっていないのに、選挙している。こうした認識のズレのあたりからして、極めて大きな問題がここにはまだたくさん入っていると思います。

司会：ありがとうございました。

本当に、この一言からいろいろな知恵が与えられた感じがありますけど、残念ながら時間が来ております。また懇親会の席でいろいろとお話を伺っていただきたらと思います。それでは稲賀先生、本当にありがとうございました。

(拍手)